
とある美琴の軽音部

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある美琴の軽音部

【Nコード】

N3080X

【作者名】

林檎

【あらすじ】

急に桜ヶ丘高校に転校する事になった御坂美琴。そして、成り行きでけいおん部に入っていく事に！？とある科学の超電磁砲とけいおんのクロスオーバー！！科学と軽音が交差する時物語は始める！！ この作品は作者がノリで書いた作品です。途中でくじける可能性があります。

プロローグ（前書き）

こんにちはは林檎です。

ホントにノリで書きちゃったよ……………。

けいおん！はそこまで詳しくないです。

友人に詳しい奴がいるのですが……………。

まあ、適当に書いていくので宜しくお願いします。

では、どござっ…！

プロローグ

「はぁ……………ここが『桜ヶ丘高校』か……………」

美琴はため息をつきながらとある高校の校門の前で立ち尽くす。

『学園都市』

美琴はその名門私立常盤台中学校に通う、超能力者。

だが、美琴のいる場所は学園都市の外。

何故美琴がこんな変哲もない学校にいるかということ……………。
実際のところ、詳しい事は美琴でも分かってはいない。ただ分かるのは自分はこの学校で二年ほど勉学を学ぶ、ということ。

突然、常盤台の校長先生に呼ばれたら、ここで勉学に励みなさい。
と、一言。

校長は美琴が常盤台に必要無いからこの学校に通えと言ってるのではないのだろう。

なぜなら美琴は常盤台エース……………レベル5なのだから。

だが、校長の話聞く限り、どうも学園都市統括理事会がからんでるらしい。

まあ、二年程度だ。二年程度なら友人との距離が離れても自分は大丈夫。と、美琴は自分に言い聞かせながらここまで来た。

見送りの時、後輩でルームメイトの白井黒子は涙をぼろぼろこぼしながら抱きついてきたりもした。

花飾りをつけた初春飾利は手を握って『頑張ってください。そして、早く帰ってきてください』と、言った。黒い長髪の佐天涙子は『御坂さんが帰ってくるのをずっと待っていますから！』と、大声をは

って言ってくれた。

他にも色々な人が見送りに来てくれた。あの少年も来ていたのだ。そして、あの少年も何かを言ったようだがそれは美琴だけの秘密らしい。

美琴は胸があたりたかくなり、絶対に帰ってくると皆に誓い、この場へとやってきたのだが…………。

「……………なんで、高校なのかなあ……………?」

美琴はため息交じりに呟く。

そう、『桜ヶ丘高校』……………。

その名の通り、この学校は高校なのだ。

美琴自身はまだ中学生三年生。まだ、高校生ではない。

確かに常盤台中学は高校生の授業過程は終了している。

義務教育終了までに世界に通じる人材を育成する。これが常盤台中学のモットーである。

「……………なんか……………不安になってきた……………?」

不安になるのは当たり前。

自分は中学生。そして、自分のクラスの人たちは全員自分より一ツ年上。

しかも全員、美琴より確実に成績が悪いのだ。

何かの嫌がらせをしてくるかもしれない。能力で解決したいところ

だが、学園都市以外での能力使用は禁止。

まあ、ばれなければいいのだが……………。

美琴は勇気を振り絞って職員室に向かう、すると、後ろから声が聞こえる。

「ちっち、ち、遅刻する～～ツ!!!」

美琴が振りかえったその瞬間、美琴は人と激しくぶつかる。

「きゃっ!?!」

「わあっ!?!」

美琴は大きく尻もちをつき、痛そうに腰をさする。

「い、ごめんなさい!?!」

美琴とぶつかった人……………。

自分と同じようにヘアピンで髪を止めて、ボブショートヘア。

身長は美琴より少し高いくらい……………。この学校の制服を着ていたので、この学校の生徒かと納得する。

てか、パンくわえながら遅刻って……………何処の少女漫画だ?

「じゃ、じゃあね!?!」

と、走り去っていく少女。

美琴はある事を確認していた。あの少女と美琴のリボンが一緒だと気づく。

「……………あの人が私のクラスメイト……………もしくは同級生ってことね……………」

美琴はあの人の性格は天然だろう。と、推測しながら職員室に入っていく。

職員室に入ると1人の先生が近寄ってくる。

「君が御坂美琴さんかい？」

「あつ、はい。」

「私は君のクラスの担任の佐藤だ。よろしく。」

「……宜しくお願いします。」

担任が美琴に手をだし、握手を求め。

美琴はそのまま、握手をして担任に大体の話を聞いて教室に向かう。

「う〜。緊張してきた……………」

「すぐに慣れるよ。」

教師は笑って言うが、それは無理な話だ。

この学校の生徒は全員年上。その中に中学生の美琴がこのこと入ってくるなんて、本当にいい事なのだろうか？

教師は先に入って、適当に色々言ったが緊張しすぎて美琴の耳には入ってこなかった。

「それじゃあ、今日は転校生が来てる。」

教師がそう言うのは美琴の美琴の耳に入ってきた。
教室の生徒たちがざわめき始める。

「では、入ってきてくれ。」

教室から担任の声が聞こえる。

美琴は腹をくくって、ドアを開けて中に入る。

「御坂美琴君だ。中学三年だが理由があつてここに来ている。皆、仲よくするんだぞ?」

教室のざわめきが一層強くなる。

「美琴君からも一言頼むよ。」

「えっと……中学生なので分からない事が多いかもしれませんが宜しくお願いします。」

美琴は頭を下げて、言う。

これから、美琴の『桜ヶ丘高校』での学生生活が始まる。

プロローグ（後書き）

唯と御坂は同じ学年です。

では、次投稿するのはいつになるのだろうか？

まあ、とにかく『とある科学の凍結光線』の方が優先ですから。

脱字、誤字がありましたら教えてください。

感想よろです。。

第一話 入部！（前書き）

こんにちは林檎です。

今回も適当に投稿します。

駄作ってのは分かってますよ！！

どうせ、へたくそってのは分かってますよ！！

でも！でも！書きちゃたから、最後まで書いて見せる！！！！

では、第一話どうぞっ！！

第一話 入部！

「はぁ……疲れた……。」

美琴はため息をつき、空を見る。

今は昼休みで美琴は1人になるため屋上に来ていた。教室にいたら、質問攻めされるに違いない。なので、逃げてここまで来たのだ。

他の生徒は全くいない。結構な穴場なのだ。

「……そう言えば、朝にぶつかった人と同じクラスだったわね……」

朝にぶつかった子は話しかけてはこなかった。

というか、ずっとボケーっとしていたのだ。眼鏡をかけた友達とどこかに行ってたが、いったいなんだろう？

美琴が購買で買ったパンをくわえると出入り口の方から声がする。

「ここだよ！和ちゃん！」

「ほんとね。誰もいない……って。」

「あつ……………」

2人は美琴を直視する。

そして、美琴も2人を直視する。

五秒くらい三人は硬直、すると、ボブシヨートの子が声を出す。

「ダレ？」

え？

美琴は分からなかった。

この子は自分と同じクラスだった。いや、そうなのだ。だから、知らない訳がない。

美琴は学園都市第三位の頭脳を持ってても理解ができなかった。

「（もしかして、双子？いや、でも、この眼鏡の人はうちのクラスにも居たし……………ああ！！もう！！訳わかんない！！）」

美琴が混乱していると眼鏡の人が言う。

「今日転校してきた子よ……………」

と、ため息交じりに言う。

「あつ！？今日ぶつかった子が！！」

驚くのはそつちなのか？

「えっと、学園都市から来た、御坂美琴です。」

「真鍋和よ。よろしく。で、こっちが……………」。

「平沢唯です!!!」

唯は自己主張ない胸を張る。

何故ここで偉そうにするんだ?よくわからない子だ。

「下の名前で呼んでいいわよ。同級生なんだから。」

「えっ……………でも……………」。

「そっだよ!!みっちゃん!!」

「みっちゃん……………?」

「美琴だから、みっちゃん!!」

美琴は少し笑みを浮かべる。

教室などではまずは質問される。でも、この二人は違った。

まず、自分と美琴は同級生と言ったのなら。美琴はここに来て敬語しか使ってない。

美琴の性格からいうと敬語は疲れる。

「なんでここに来たかは気になるけど、よろしくね。美琴。」

和は手を美琴の方に差し出す。

美琴はその手をゆっくりと握る。

「ヨロシク。和に唯。」

和と唯も少し笑う。

すると、唯の方からグウ〜とありきたりな音が聞こえる。

「えへへ……………おなかへっちゃった。」

和と美琴は唯の方を見て少し笑う。

「じゃあ、食べようか？」

「うんっ！ー！」

〜放課後〜

「じゃあ、私は部活行くね。」

唯はカバンを持って教室を出ようとする。

「わかった。」

「あれ？唯って部活入ってたの？」

美琴は疑問に思う。

確かにそつだ。唯は誰が見ても一日で二ト予備軍というのが分かる。

「……………みっちゃん。私だって何かはやってるよ……………」

と、言うが実際は高校生からである。

美琴は部活という物に少し興味が出る。

美琴は部活をした事がない。案外興味はあるのだが……………。常盤台中学は部活にも力を入れており、美琴の運動神経でもついていくのも疲れるのである。

それに、一々後輩がうるさい可能性がある。でも、ここにはあの状態はいない。

部活ができるかもしれない。と、美琴の脳裏を駆け巡る

「ね、ねえ唯。……………部活見学に行っていない？」

「えっ？ホントに？」

「うん。帰っても暇だし……………見学ならいいかなって……………」

「ようこそ！ー！けいおん部へ！ー！ー！」

唯は美琴の腕を取り、部室に向かう。

「ちよっ！話聞いてた！？」

「お茶とおかしをだすからあ〜。」

「だから、聞いてた！？私は見学に

美琴は唯に連れて行かれる。

和はその姿を見て、苦笑いをしながら手を小さく振る。

「助けてよ！和あああああああああああああ！！！！」

（軽音部部長）

「やっほー！！」

「よう、唯。遅かったな。」

このカシューシャをつけた男のような性格をしたのは田井中律。
一応だがこの軽音部部長。

「……………その後ろの子は誰だ？」

きれいな黒い長髪の人秋山澪。

と、この天然の行動に不審を持つ漣。

「そう　ムグツ「違います！見学に来ただけです！！」

「プハッ〜！」

美琴は唯が言いきる前に口を塞ぎ言う。

漣は呆れて頭を抱える。

律はどこかのコント番組の芸人のようにズルツと滑ってこける。

「で、でも！軽音部には興味があるんでしょ！？」

と、唯は必死に説得。

まあ、興味がなければ来るわけがない。

「……………まあ、あるけど……………。部活とかやったことないから興味が湧いただけで……………」。

漣は溜息を一回するとしゃべり出す。

「まあ、とりあえず寛いで行ってくれ。」

「はい。……………えっと……………」。

「秋山漣だ。こっちが……………」。

「田井中律です！…この軽音部の部長です！…！」

「琴吹紬よ。よろしくね。」

「はい。よろしくお願ひします。秋山さんに田井

「まった

「!!」……………何、唯？」

すると、唯は美琴の方に指をさす。

「みつちゃん！ここの皆は全員同級生！敬語なんていらないうよ！！」

美琴は少し笑みを浮かべる。

「そうだったわね。じゃあ、よろしくね。漣に律に絢。私の名前は御坂美琴。」

美琴は漣の方を向くと、言う。

「練習しないの？」

漣の胸にこの言葉が突き刺さる。

練習と言う前に唯はまだギターを持っていない。

練習なんてこの部活が始まってから一回もやっていないのだ。威厳として何とかしたい。

「えっと、こ、これから私とムギと律で合わせてみるから、き、聞いてみるか？」

美琴はふと疑問に思う。

「唯は？」

「私、まだ楽器持ってないから。」

よくそんなんで入ったな。と、美琴は言う。

すると、漣、律、紬は自分の楽器が置いてある場所に行き、楽器を何回かいじる。

「じゃあ、やるぞ。」

律がドラムのスティックをあげてカウントを取る。

「123、1234！」

曲は『翼をください』

小学生のころ聞いた事がある曲だ。

唯はこの曲を聞いてこの軽音部に入る事を決めたらしい。

「（あんまり、うまくないわね……………。）」

だが、そんなこと言えるわけがない。

唯みたいな天然ならともかく、美琴は唯みたいな天然ではない。

ましては初対面の年上に「あんまり、うまくないですね」なんて言えるわけがない。

そんな事を考えている内に演奏が終わる。

「どうだった!？」

律に漣、そして紬も聞いてくる。

やはり、そこは「上手でしたよ」なんて行った方が言いにかまっている。

だが、美琴がそれを言う前にあの天然娘は言いきる。

「やっぱり、うまくないね。」

と、ニコツと撃沈。
律はズルツとこける。

「お前が言うな!!」

二人に突っ込まれる唯。

そのまま、何故か二人に攻められ続ける。
すると、絢が美琴の方に近づいてくる。

「どうだった？」

「えっと……………」

「あまり、うまくはないでしょうけど、とても楽しい部活よ。」

ニコツと笑う。

「(ここなら、自分らしくいられるかも……………)」

美琴は絢の方を向く。

「絢……………私も軽音部入れるかな？」

「もちろん!あと、私の事はムギでいいわよ。」

こうして、御坂美琴の軽音部での部活動が始まった。

第一話 入部！（後書き）

林檎「ムギの喋り方が難しい……………」。

美琴「適当に書くからよ。」

林檎「まあ、そうだけど……………」。

美琴「落ち込むな。めんどくさいから。」

林檎「……………」

美琴「…………だから…………」。

林檎「…………アバズレ短パン……………」。

美琴「何か言ったかしら？」

林檎「あばばばばばばばば……………」。

美琴「さっさと立て、そして次回予告——！」

林檎「…………で、では、次回は……………ギターを……………買います……………ガクツ……………」

美琴「じゃあ、宜しくね。」

第二話 楽器！

キンコーカーンコーン。

「ふう。やっと終わった……。」

美琴は背中を伸ばす。

すると、首がパキッパキッと気持ちいい音が鳴る。

「唯、美琴。」

「あ、和ちゃん。」

「一緒にかえろ」

「ごめん！今日部活かないといけないのよ。」

美琴は手を合わせて少し頭を下げる。

すると、唯は少し笑う。

「どうしたの？唯？」

「今日ね！ムギちゃんが美味しいお菓子持ってきてくれるんだあ」

美琴はあきれる。

「ギターやるんじゃないの？」

「えへへっ……。」

美琴は窓の外を見る。

(今日から……部活かあ……)。

美琴は自分が部活をやる事に実感を得ず、ボーっとしてたら、唯が声をかけてくる。

「みつちゃん！部活行こー！」

「……うんっ！」

……。

あれっ？OPは？ by 作者

（部室）

「こんにちわ〜。」

美琴と唯は部室に入るとすでに他の三人は来ていた。

美琴は他の三人に挨拶して、自分の席に着く。

すると、唯が漣に質問する。

「ねえねえ、漣ちゃんは どうしてギターじゃなくてベースを始めたの？」

漣は少し考えて言う。

「だって、ギターは……………恥ずかしい……………」

「は、恥ずかしい!？」

「ギターってバンドの中心って感じで、先頭に立って演奏しなきゃいけないし……………観客の目も自然と集まるだろ？自分がその立場になるって考えただけで……………」

漣が目を閉じて数秒すると、頭からボンツ！と音を立てて煙が出てくる。

そのまま、倒れそうになるのを袖が支える。

どうやら、漣は少し繊細の様だ。

「いや、少しじゃないでしょ？」

美琴の独り言はほっとして……………っと。

唯は話題を変えて紬の方に質問をする。

「ムギちゃんはキーボードうまいよね。キーボード歴長いの?」

すると、紬は唯の前に紅茶を置くと質問に答える。

「私、四歳の頃からピアノ習ってたの。コンクールで賞をもらった事もあるのよ。」

ニコツと笑いながら言う。

「へっ!?!す、すごいねえ〜!!」

何故軽音部にいるのだろうか?

それは永久に闇の中に消えていったのであった……………。

「そんな訳ないでしょ。馬鹿作者。」

…………… 案外、傷つくんだよ?

「そう言えば、ずっと疑問に思ってたんだけどさ、この部屋ってやけに物がそろってるけど……………、最近の高校ってこんな感じなのかな?」

唯が新たな質問をする。

「ああ、それは私のうちから持ってきたのよ。」

紬は即答。

よく見ると、食器棚まである。

どうやって持って来たんだろう?と、美琴は疑問に思う。

「自前!?!」

「はいっ!」

紬はかなりお嬢様の様だ。

気をつける! 紬お嬢様に何かしたら、SPのみなさんが一斉に襲い掛かってくるぞ!!

「はいはい。アツチ逝つといて。馬鹿作者。」

字が違う!?!

「りっちゃんはドラムって感じだね。」

「なにおう!?! 私にもちゃんとすごく立派な聞けばすごく誰でも感動する様な理由があるんだぞ!」

「じゃあなに?」

美琴は意地悪そつに笑いながら聞く。

「それは!?!.....それはだな.....。」

どンドン律の音が小さくなっていく。

「.....えっと.....あれだ.....かっこいいから.....。」

「そんな事だと思った。」

「だってさあ！ギターとかベースとか、キーボードとか指でちまちまするのを想像しただけでキイイイイイイ！！！！ってなるんだよ！！！！」

楽器選びにも性格が出るのです。

まあ、美琴さんは鈴が似合って「何か言った？」……………いえ、何も……………。

「そう言えば、ムギちゃんって合唱部に入りたかったんでしょ？」

唯が話題を変えてくれたおかげで作者はダメージを負わずに済みました。

この場を借りてお礼を……………ありがとう。

「ええ。でも、滅多に出会えないとっても楽しくて愉快的な人たちの仲間になりたかったの。」

「（）（珍獣って事ですか！？）（）（）」

澪と律は同時に思う。

「そう言えば平沢さん、御坂さん。ギターは買ったの？」

「唯でいいよ！私も澪ちゃんの事、澪ちゃんって呼んでるし！！」

唯に続いて美琴も紅茶をすすりながら言う。

「私も美琴でいいわよ。」

実際の事を言うと、そう呼んでほしかった。
常盤台では『御坂様』や『お姉さま』としか呼ばれた記憶がない。
外でも、『御坂さん』や『御坂』とそんな感じだったので、自分の
事を名前で呼ぶのは親ぐらいだった。
なので、ここに来て初めて名前で呼ばれたのだ。

「ゆ…………唯…………み…………美琴…………。」 / / / /

顔を赤くしながら上目遣いで言う澪。

美琴と唯は正直に可愛いと思った。

ファンからすれば萌え萌えキュン！！って訳なのだ。

「で、唯、美琴。ギターは？」

律が終わりそうにないので唯と美琴に聞く。

「えっ？ギター……………？ああ！！そっか！忘れてた。私ギター
やるんだったー！！」

あきれ果てる部員の皆様。

「軽音部は喫茶店じゃないぞ？」

「えへへ…………。」

すると、美琴は澪に質問する。

「ギターってどれくらいするの？」

「ん〜。安いのは一万円台くらいからあるけど……。あんまり安すぎるのも良くないからなあ……。五万円くらいがいいかも。」

「ええっ！？五万！？……。私のおこずかい十ヶ月分だあ〜……。……。」

唯は律の方を向くと笑顔で言う。

「部費で落ちませんか？」

律も負けずと笑顔で反撃。

「落ちませんっ」

唯は落ち込むが美琴は普通の顔をしていた。そして、一番言っではいけない事を言う。

「結構安いのね……………」

空気が凍る。

美琴はそれに気づかず紅茶をゆっくりと飲む。

説明しようか。

美琴は学園都市にいた時はレベル5。奨学金が毎月『それって学生にあげる金じゃねえーよな？』ってほどくれる。しかも、それは今も続いている。そして、美琴自体が常盤台にいる事からそこまで買い物をしていない。しかも、ジュースすらタダで手に入れる。

すると、どんどんお金がたまっていき、今や美琴の通帳はゼロがいっぱい並列で並んでいるのだ。

そのせいか、金銭感覚が壊れている。

「…………アレ？皆どうしたの？」

「…………そう言えば美琴って、お嬢様だったな…………。」

美琴はキョトンとした顔をして、澁を見る。

「今度の休みに楽器を買いに行きましょう」

紬はとても楽しそうに言う。

他の三人は2人のお嬢様の金銭感覚に啞然としていた。

時はぶっ飛び次の休みの日。

「あのおバカはなんでこんなにも遅いのかしら……………!?!?」

美琴はイライラしている。
それもそうだろう。唯が待ち合わせ時間になっても姿を現わせない。
つまり遅刻だ。

それにしても遅い。美琴たちはもう、二十分も待っている。大体、
唯がいなければ話にならないというのに。

「まつ、まあ……落ち着こうぜ……？美琴………？」

律は律らしくない声で美琴に呼び掛ける。

それも当り前だ。美琴はあまりの怒りでわずかに漏電しているのだ。
日常的に電撃を浴びて耐性がついた美琴の後輩、白井黒子やあの不
幸な少年などの能力がなければ近づく事も出来ないだろう。

その前に律や漣や紬は全員、学園都市の住民ですらない。能力の耐
性どころか、これが初めて能力を見ているのだ。まあ、紬は美琴の
能力を見て感動しているけれど……。

「あつ！きつ来たぞ！」

漣がおびえながら声をあげる。どうやら、やっと来たらしい。

唯はこっちに向かって手を振っている。

信号が青になり、駆けだすと、目の前に歩いている男性とぶつかっ
た。軽く謝り、信号を渡りきるがそこにいた犬を連れて散歩してい
る人に挨拶をして、犬を撫で始めた。
そこで、美琴の堪忍袋の緒が切れる。

「……………焼こうかしら？」

漣はひっ！？と、声をあげる。

でも、さすがに美琴は友達を焼いたりしない。焼くのは後輩の変態

さんと鈍感な不幸人間だけだ。
ここの裏話。

美琴はこの後、いつまでも犬を撫で続ける唯に軽い電流を流したのは内緒である。

「お金は大丈夫だった？」

澪は美琴と唯に聞く。

「私は大丈夫よ。」

「私はお母さんに無理言つて五万円前借りさせてもらったの！これからは計画的に使わなくちゃ！」

唯は突然立ちどまる。

すると、唯は左側にある洋服店に向かって歩き出す。

「今なら買える……！！！」

唯は外に置いてある洋服を見つめる。
美琴はため息をつく。

「……………お金使っちゃダメよ？」

「ありがと！みつちゃん！」

唯はそのまま店に入っていく。

唯に続いて律に紬も入っていく。漣と美琴はその三人を親のように見つめてゆつくりと入っていく。

そのあと、唯は言われたと通りに何も買う事もなく店出た。店員からすれば迷惑にすぎないのだが。

次に行ったのは小物店。そこで美琴はゲコ太を見つけて、大興奮。ほんとに迷惑だ。

そのあとには食品売り場で試食だけをする。だから、迷惑だ。次にゲームセンターで律の金を使い、楽しむ軽音部。律の財布から野口が数人飛んで逝ったのは言うまでもない。

そして、遊び疲れた軽音部一行はとある喫茶店で休憩中。

「はあく、疲れたあく。」

なんて言ってるが楽しんで満足してるような顔で言う唯。

「へへ。買った。」

ポンポンとカバンを叩く律。

「楽しかったですね。」

初めての経験が多かったのだろうか、紬は嬉しそうに言う。

「次どこ行こっか？……って、アレ？何か忘れてない？」

「「楽器だ！楽器！！」」

美琴と滲は息をそろえて言う。

「おお！？しまった！！」

場面は変わり、楽器屋。

店内に入ると出入り口近くにはギター関連の商品が並んでいる。

そのほかにも、ドラムやキーボード、音楽関係の機材などが沢山並んでいる。

「すげーいい！」

唯はそのギターやその関連商品を見て完成の声をあげる。

「ゆーい、美琴、どれがいいか決めたか？」

律が2人に聞く。

「なんか、選ぶ基準とかあるのかなあ？」

唯は並んでいるギターを見ながら呟く。

「もちろんあるよ。ギターって音色はもちろん、重さやネックの太さとか色々あるんだ。だから女の子はネックが細い方が

「あっ！このギター可愛い！！」……………聞いちゃいねえ……………」

唯は明るめの茶色っぽいギターの前に座り込む。そして、しばらく見つめる。

「そのギター。二十五万もするわよ？」

美琴が衝撃の真実を唯に告げる。

「これは流石に手が出ないや……………」

すると、美琴が近づいて唯に聞く。

「このギター、そんなに欲しいの？」

「……………うん。」

「ほら、あっちに安いのあるぜ？」

律が左の方の中古が置かれているコーナーを指差す。

だが、唯はなかなか離れようとはしない。

「そういえば、私も今のベースが欲しくて……………」

いきなり語り始める湊。

「悩んで、悩んで……………」

そんな事より、唯のギターをどうするか考えないのか？と疑問に思う美琴。

「あたしもドラムセットが欲しくて値切って値切って……。」

次は律が語り始める。

いい加減に考えてあげないのかい？

「店員さん泣いてたぞ。」

漣がきつぱりと言う。

律ならやりそうな事だ。と美琴は思う。

「あの……値切るって？」

紬がいきなり質問してくる。

どうやら、温室育ちのお嬢様は値切らないのだ。

大体、値切るなんてそうそうしない。値切るとしたら家電ぐらいだ。

「欲しいものを手に入れるために、努力と根性でまけさせる事だよ

」！

「すごいですね！何か憧れます！」

憧れる要素があるのだろうか？

漣は唯を見る。

「……………唯。」

しばらく黙りこむ。そして、突如律が声をあげる。

「皆でバイトしよう!」

「むり。」

美琴が即答。

「な、なんでだ!」

律は自分が提案した事を却下されたことに疑問に思い、美琴に聞き
く。

「だって……バイトは大半、高校生からじゃない……。」

そう!美琴はまだ中学生。

大半のバイトは高校生から。美琴はまだ中学生なのでできないのだ。

「あつ……。そうか……。」

落ち込む皆。

「……あ〜!もう!仕方ないわね!やってやるわよ!」

美琴は沈黙が耐え切れず、声をあげる。

「でも、べつやってだ?」

遷の言つと通りである。

美琴は戸籍上、まだ15歳にもなっていない。ならどうするか。

その方法はただ一つ。

「能力で国のコンピューターにハッキングする。」

「……………ええ……………ッ!?」

律と澪は声をあげる。

「そそそそんなことででででできるのか!?!」

「大丈夫よ。ここは学園都市と違って対能力者用のセキルティがないのよ?」

「いやいやいやいやいや!!!!そういう意味じゃなくて!」

「ハッキングって何?」

ここで唯の天然が爆発するがそれどころではない。

「大丈夫よ。私はレベル5よ?捕まるようなミスはしないって。」

「だから!そう言うのじゃなくて!犯罪行動しちゃだめ!!」

もう、キャラが壊れている。

「じゃあ、どじすんのよ?」

「……………ね、年齢を偽る……………?」

「結局犯罪じゃない。」

結局、年齢を偽ってバイトをする事になった美琴。

「(どうしようかしら……………?)」

その前に自分のギターを買うのを忘れてた美琴であった。

第二話 楽器！（後書き）

林檎「初バイトだね。」

美琴「……………ギター買うの忘れてた。」

林檎「まあ、頑張つて。次回は！！」

美琴「バイトします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3080x/>

とある美琴の軽音部

2011年10月19日08時19分発行